

いわゆる「局地的市場圏」論の批判（Ⅰ）

湯村，武人

<https://doi.org/10.15017/4403476>

出版情報：経済学研究. 35 (5/6), pp.1-22, 1970-02-27. 九州大学経済学会
バージョン：
権利関係：



経 済 学 研 究

第 35 卷 第 5, 6 号

February 1970

Vol. 35 No. 5, 6

いわゆる「局地的市場圏」論の批判

——（その一）——

湯 村 武 人

ま え が き

『大塚久雄著作集』全 10 巻が公刊された。そこで、これを機会に、大塚氏のいわゆる局地的市場圏論について、かねてからの疑問点のいくつかをまとめることにした。一つには、氏を編者とする『西洋経済史』（筑摩書房）を講義のテキストに使用し、ためにそれらの疑問をわたしとしても整理する必要に迫られたためもある。

もっとも、局地的市場圏論の批判と題してはいるが、厳密に狭い意味でのこの理論の批判に限らない。必要な範囲で、ひろく氏の他の諸業績をも批判の対象に含めている。それというのもこの理論は、氏がこここれまでに発表されてきた諸業績の、いわば結節点をなすものと考えられ、氏の理論体系それ自体から切り離して、単独には取扱えない性格をもっているからである。

なお、大塚氏の諸業績からの引用は原則として前記『著作集』によったが、『西洋経済史』についてだけは筑摩書房版によった。他意はない。受講学生の便宜のためである。

本稿の構成は次の如くである。

- 第一章 マルクスの場合
- 第二章 レーニンの場合（以上本号）
- 第三章 共同体論
- 第四章 局地内商業と局地間商業
- 第五章 コスミンスキーの場合

第一章 マルクスの場合

（1）

『西洋経済史』の冒頭を飾る大塚久雄氏の論文、「近代化の歴史的起点——とくに市場構造の観点からする序説」は、その本論を次のような文章で始めている。

「マルクスが『資本論』（第一部、第一章および第四章）で用いている表現に「商品世界」（Warenwelt）が資本を産みおとすというのがある。商品として生産された生産物が市場で押しあいへしあいしながら互いに貨幣を媒介として交換される、そうした関係を通して社会の物質代謝がとりおこなわれていくような市場経済というか、商品経済というか、そうしたものが言うところの商品世界だといってよいであらう。こうした商品世界が資本（もちろん産業資本）を産みだす、あるいは、資本はこうした商

品世界のなかから生れてくる、というわけである。ところでマルクスによれば、商品世界はその底に商品生産という生産関係をふくんでいる。あるいは、商品生産という生産関係を土台としている。けれども、こうした生産関係はわれわれの眼前にそのものとしては姿を現わしてこない。われわれの眼に映ってくるのは、ただ商品流通というその現われだけなのである。…こうして、当面われわれが実証の立場に立つかぎり、資本（産業資本）を押しあげてくるという商品世界への歴史的な接近は、どうしても商品流通というその現われを通して以外、まったく途がないといわねばならない。われわれが資本主義の形成と成長のあとを歴史的にたどろうとして、市場関係を前面に押し出してくる理由は、まずここにあると言ってよい。」(p. 6-7)

大塚氏がここで、「商品世界はその底に商品生産という生産関係をふくんでいる。…けれども、こうした生産関係はわれわれの眼前にそのものとしては姿を現わしてこない」といわれるのは正しい。確かに商品は、そのものとしては、それがいかなる生産関係の下に生産されたものであるかを、われわれに教えてはくれないからである。ある商品は、それがブルジョワ的関係において生産されようと、古代的または封建的生産者の手によって生産されようと、それが商品であることにおいて違いはないし、そのものとしてみる限り、それがいかなる生産関係のもとに生産されたかを明らかにしない。

けれども、大塚氏のいわれるように商品ではなくて商品流通であれば、その背後にある生産関係が明かになるかといえば、事情はやはり同じではないだろうか。氏のいわゆる「商品流通」、すなわち一般的な用語でいえば商業は、大塚氏自身がしばしば力説されるように、「人

類の歴史とともに古い」ものであり、エピクロスエピクロスの神々のように世界の合間合間にさえも存在しうことは、「商品」自体の場合と同じだからである。

かくして大塚氏は、上記の引用に続けて次のように述べられている。

「さて、「商品世界」が資本を産みおとすという表現の意味内容がおよそ以上のようなものであるにしても、そのばあい、「商品世界」という語の意味するところはまだきわめて内容不確定であることを免かれない。少し考えただけでも、「商品世界」という語によって意味されるもののなかには、歴史的に例えば次の三つがふくまれていることが容易にわかるであろう。

(1)まず、国際的な分業関係をふまえた貿易、そうした商人の営みがある。さらに国内的な規模についてみても、(2)局地間（しばしば遠隔地間）の分業関係をふまえた商業、そうした商人の営みもあれば、(3)また、局地内部における、商人の介人の余地がきわめて少ない社会的分業の關係に支えられた小商品生産者どうしの売買もありうる。ところで、歴史上封建制の体制の内部で資本主義（だから、産業資本あるいは賃労働の雇傭にもとづく産業経営）が最初に形成され、成長をはじめるといふばあいに、そうした資本主義（産業資本）を現実押し上げてきた商品世界は、いったい、以上の三つのうちどれであったのだろうか。」(p. 7)

どうもわからない。さきに氏は、「商品世界」はわれわれの眼にその背後にある生産関係を明らかにしてくれない、したがってわれわれは「商品流通」から著手せざるをえないと述べられたばかりである。しかるここでは、その斥けたばかりの「商品世界」に再び戻り、その三つの種別を云々される。あきらかにここは、「商品

世界」ではなくて「商品流通」と言うべきであるとわたしは思うが、その「商品流通」にしても、その三つの種別、すなわち氏のいわゆる「国際的な分業関係をふまえた貿易」、「局地間の分業関係をふまえた商業」、「局地内部における……小商品生産者どおしの売買」は、国際間の貿易や局地間の商業であれば前期的であるとは限っていないし、逆に「小商品生産者どおしの売買」であっても、それは中世初期にも、いや古代にさえもみられるであろう。「商品世界」からこのように「商品流通」の形態へと問題を移してみたところで、要するに分析の視角が流通面にあることに違いはないわけであり、そうした視角から資本主義という新しい生産関係の誕生の過程を明らかにすることはできないであろう。

マルクスは、『資本論』第三卷、第二十章「商人資本に関する歴史的考察」において、商業のおよぼす分解作用は「生産する共同体の性質の如何に懸るところが大きい」（岩波文庫版、第九分冊、p. 200）といい、「どの程度までそれが古い生産様式の分解を惹起するかは、まず第一に、その生産様式の堅固さと内部構成との如何に懸る。そしてこの分解過程がどこに帰着するか、すなわち、いかなる新たな生産様式が古いそれに代って現われるかは、商業にではなく、古い生産様式そのものの性格に懸る」（p. 203）といい、また、「近代的生産様式は、その第一期なる工場手工業時代においては、そのための諸条件がすでに中世の内部で産み出されていたところにおいてのみ発展した」（p. 204）と述べている。ここで「生産する共同体の性質」、「生産様式の堅固さと内部構成」、「生産様式そのものの性格」、「そのための諸条件」という表現で示されているものが何であるかはあとで明らかにす

ることにして、さしあたりここでは、どのような接近方法をとろうと、視角を流通面のみにおく限り、近代的生産様式の出現を究明しえないということだけは明らかであろう。

わたしの思い違いでなければ、大塚氏が「商品世界」や「市場構造」という視角から資本主義発達史を組立てるという方法をとられたのは、この論文においてはじめてであると思うのだが、氏はいったい、なぜこのような方法の変更をおこなわれたのだろうか。さらにまた、「商品世界」という表現を一たんは斥けながら、再びまた、「商品流通」ではなくて「商品世界」に戻るということを敢てされるのは何故であろうか。その明確な理由は、むしろ、わたしにはわからない。けれども、わたしは思うのだが、その理由はおそらく、冒頭に引用した文章にみえる、「商品世界が資本を産みおとす」という、氏のいわゆるマルクスの言葉にこだわってのことであろう。

けれども、大塚氏の言葉に反して、『資本論』第一部第一章や第四章は、そもそも、「商品世界が資本を産みおとす」とか、ことに「商品世界が資本（産業資本）を産みだす」などとは言っていない。

たしかに、第四章第一節の冒頭に、「商品流通は資本の出発点である。商品生産と発達せる商品流通たる商業は、資本の成立する歴史的前提をなしている。世界商業と世界市場は、第十六世紀において資本の近代的な生活史を開始する」、という言葉はある。だが、誰もが承知しているように、マルクスがここで述べていることは、商品流通は資本の成立する「前提」であるということにとどまり、大塚氏のいわれるように、商品が「押しあいへしあい」すれば資本が生れると言っているわけではない。それどころ

かマルクスは、この章で、「流通自身から貨幣の資本への転化、剰余価値の形成を説明することは不可能」であると明言しており、「資本は流通からは発生し得ない。そして同時に、流通から発生し得ないというわけでもない。資本は同時に、流通の中で発生せざるを得ないが、その中で発生すべきでもない。……ここがロドスだ、さあ跳べ、」という有名な文句を述べてさえている。

それに、マルクスの前にみた文章、すなわち、「商品流通は資本の出発点である」という文章をかりに氏のように理解するとすれば、じつは氏自身がこれまでにとられてきた基本的態度、つまり、「資本主義発達の起動力ないし推進力を貨幣経済あるいは商業の発達に求めるといふ通説的な立場」を斥ける態度に、矛盾することになるであろう。

こう言えば、大塚氏はおそらく反論されるであろう。『資本論』第一部第一章および第四章が「資本は流通からは発生し得ない」と述べていることは、自分も百も承知している。だからこそ自分は、「商業の発達というような表面的な現象ではなく、封建制の解体のうちに形成されてくる中産的生産者層」の両極分解や、「局地内部における、商人の介入の余地がきわめて少ない社会的分業関係に支えられた小商品生産者どうしの売買」のなかに資本主義の発達を求めないのである、と。

だが、いわゆる局地的市場圏内部における中産的生産者層の両極分解によって、『資本論』第一部第四章の提起している「一般的定式の矛盾」、すなわち前にみた「資本は同時に、流通の中で発生せざるを得ないが、その中で発生すべきでもない」という矛盾を、果して充分に解決することができるであろうか。

この点の曖昧な処理が、あとで検討を予定している共同体論の致命的な缺陷とあいまって、大塚氏の歴史理論全体にあやまった性格を与えているように、わたしには思える。

(2)

『資本論』が、第一部、第四章第二節「一般的定式の矛盾」において提起した問題を、労働力という特殊な性格をもった商品を登場させることによって、同章第三節「労働力の買いと売り」において解決していることは、衆知のとおりである。ただし、たのためにはいくつかの条件がみたされることが必要である。その第一は、労働力の所有者がその商品たる労働力を自由に売ることができるようになっていなければならぬということであり、その第二は、彼がその労働力商品を売らざるをえない状態におかれているということである。

「貨幣の資本への転化のために、かくて、貨幣所有者は、自由なる労働者を商品市場に見出さなければならぬ。二重の意味で自由である。すなわち、彼は自由な人格として、自分の労働力を商品として処置しようということ、彼は他方において、売るべき他の商品をもっていないということ、すなわち、彼の労働力の現実化のために必要な一切の物財から、放免され、自由であるということである。」(岩波文庫版、『資本論』、第一分冊、p. 294)

そして、このような条件がどのようにして整えられるかを明らかにする章が、第七篇第二十四章、「いわゆる本源的蓄積」であることもまた、わざわざことわるまでもないであろう。有名な章ではあるし、必要最少限度の引用をしておく。

「資本主義社会の経済構造は封建社会の経済

構造から出てきた。後者の解体が前者の諸要素を遊離させたのである。

直接生産者、労働者は、彼が土地に縛りつけられていて他人の農奴または隷農となっていることをやめた後に、初めて一身を自由に処理することができた。彼の商品が市場を見出すところへはどこにでもそれを持って行くという労働力の自由な売手となるためには、彼は更に同職組合の支配、その徒弟及び職人の制度、阻碍的な労働規定から解放されていなければならなかった。かくして、生産者を賃金労働者に転化する歴史的運動は、一面では農奴の隷属及び同職組合強制からの彼らの解放として現われる。」（第四分冊，p. 268）

この引用文は、マルクスが、資本主義時代が到来するためには、すでにそれ以前に、封建社会の経済構造の解体が、すなわち農奴制度やツンフトの廃止が行なわれていなければならぬと考えていたことは示している。しかも、この解体は、マルクスによれば、産業資本家のまったく与り知らぬ事件や勢力によって遂行された。

「産業資本家、この新たな主権者、彼らとしてはまた、同職組合手工業親方のみではなく、富源の所有者なる封建領主をも駆逐せねばならなかった。この方面から見れば、彼らの興起は、封建的勢力とその憎むべき特権とに対する戦勝の成果として、また同職組合とそれが生産の自由な発展及び人間による人間の自由な搾取に課した桎梏とに対する戦勝の成果として現われる。しかし、産業の騎士が剣の騎士を駆逐することは、彼らの全く与り知らない諸事件を利用することによってのみ成就された。かつてローマ被解放民が、その保護主の主人となるために用いたものと同様に陋劣な手段によって、彼らは成り上ったのである。」（p. 269）

「資本主義的生産様式の基礎を創出した変革の序曲は、一五世紀の最後の三分の一期及び一六世紀の最初の数十年間に起きた。サー、ジェームズ、ステュアートが適切に言っているように『到るところで徒らに家や屋敷を充たしていた』封建家臣団の解体によって、一団の無保護なプロレタリアが労働市場に投げ出された。それ自身ブルジョアの発展の産物だった王権は、その絶対的主権の追求においてこの家臣団の解体を強行的に促進したとはいえ、決してその唯一の原因ではなかった。むしろ王権及び議会に最も頑強に対抗しつつ、大封建領主が、彼自身と同様に農民も同じ封建的権利を有していた土地から、農民を暴力的に駆逐することによって、また農民の共同地を横領することによって、比較にならないほど大きなプロレタリアートをつくり出したのである。」（p. 274）

（3）

つぎに、大塚氏の「原始的蓄積」論をみよう。

氏は、その著書『欧州経済史』（『著作集』、第四巻所収）において、原始的蓄積は、一方に将来資本家たるべき人々の手中への資金の集積、他方に土地及びその他の生産手段を喪失し、賃金労働者として働くよりほかに生活の道のないような貧しい人々の形成、という二つの側面をもつと指摘したあと、次のようにいわれる。

「このような「原始蓄積」の過程は歴史上種々な形の、およそ牧歌的とはなしえない経済外的な強力を伴っていた。すなわち、上述の両条件がなんらか強力的に作りだされ、またそれが「産業資本」として強力的に結びあわされることによって、「産業資本」の生誕と成長が異常

に促進される、という局面がみられた。そして、しばしば、この経済外的な局面のみがとくに「原始蓄積」の名をもってよばれることもある。……

しかしながら、そのばあい何よりも必要なのは、「原始蓄積」の経済外的側面が現象のうえで一見どのように派手にみえようともあくまで、単に基礎的な局面を媒介するものにすぎなかったという事実を、はっきりと念頭においていることであろう。すなわち、「産業資本」形成の基礎的な前提条件として、(一)一方における貨幣の集積。(二)他方における貧民の遊離、この二つをさきにあげておいたが、しかしそれらの事実だけならば、実は世界史上のどの時代またどの地域にも見出されるのであって、このことから判かるように、それらの両条件の存在だけから直ちに「産業資本」の形成が招来されるとは、とうていなしえないからなのである。…であるとするれば、以上の両条件を一つに結びつけ、「産業資本」を形成せしめていく基本的条件は、たんなる経済外的な強力などではなく、どうしてもなんらかの経済的過程のうちに求めねばならないことが明らかであろう。それでは、(一)集積された貨幣、と(二)遊離された貧民、この両者を結びつけて「産業資本」に形成することを可能かつ必然ならしめるような経済的過程とはいったいどういう風なものであったろうか。われわれが「産業資本」の形成を歴史的に追求していこうとするばあい、実はまずこうした問題に当面するのである。」(『著作集』、第四巻、p. 43-4)

ひとびとは、大塚氏がここで重大な誤りをおかしておられることに気付くであろう。氏は二つの条件について、集積された貨幣と遊離された貧民といい、後者についてはまた、「土地及

びその他の生産手段を喪失し、賃金労働者として働くよりほかに生活の道のないような貧しい人々」といわれるが、マルクスはそんなことは言っていなかった筈である。『資本論』の教えるのは、「自由な人格として、自分の労働力を商品として処理し得るということ、彼は他方において、売るべき他の商品をもっていないということ」、この二重の意味において自由な労働者の形成である。それは決して単なる「貧民」などではない。この「自由な」という形容詞のもつ意味がいかに重要であるかは、マルクスがそこで、「労働力の自由な売手となるためには、彼は更にツンフトの支配、その徒弟及び職人の制度、阻碍的な労働規定から解放されていなければならない。かくして、生産者を賃金労働者に転化する歴史的運動は、一面では農奴的隷属及びツンフト強制からの彼の解放として現われる」、と述べていることで明確である。氏はそれを単なる「貧民」にスリ替えて、こんな条件は世界史上どの時代またどの地域にも見出されるといわれるが、全くいわれのない言いがかりであるといわねばならない。原始的蓄積とは単なる「貧民」の形成ではなくて、農奴制とツンフトとから解放された自由な貧民の形成過程なのである。

『欧州経済史』はさらに、それでは産業資本の原始的形成を可能かつ必然ならしめる基礎的経済的過程とは何かと自ら設問し、前にみた中産的生产者層の両極分解論を展開する。

「封建制(=封建的生产様式)の崩壊過程のなかから生じてくる広範な「中産的生产者層」(=中小の商品生産者としての農民層および職人層)がさらにしだいに貧富の両層に分化し、その極貧乏で自ら独立の営みをなしえなくなった人々は富裕な生産者のもとに賃金労働者とし

て雇われるようになる。こうした「中産の生産者層の産業資本家及び賃金労働者への両極分解」こそが「産業資本」の原始的形成過程における基軸的事実にほかならぬ。」(p. 45-6)

同じことを『西洋経済史』についてみれば、「資本を押し上げてくる「商品世界」を、さきにあげた三つのうちの(3)、つまり局地内部における社会的分業をふまえ、すぐれて小商品生産者どうしの売買として現われてくるような、そうした市場関係……換言するならば、国際貿易でもなく国内の遠隔地間商業でもなく、局地内における、しかもすぐれて小商品生産者どうしの商品交換の関係こそが資本（産業資本）を産みだすことによって、歴史上資本主義の形成の発端を画するものとなったのだ」(p. 12)という個所がそれであろう。

かくして、大塚氏の原始蓄積論はすなわち中産の生産者層の両極分解論、あるいは局地的市場圏論ということになるが、そこで次のような疑問が生じるてくることになる。

(4)

その一は、本源的蓄積が「本源的として現われるのは、資本と資本に対応する生産様式との前史をなすものだからである」(第四分冊, p. 268)といい、また、「民衆の大群からの土地及び生活手段及び労働用具の収奪、この怖るべき苛酷な民衆収奪が、資本の前史をなす」(同, p. 347)ともいうマルクスの規定は、このような大塚氏の理論と矛盾しないかどうか、ということである。いや、大塚氏自身も、「産業資本が歴史上はじめて姿を現わしてくる、つまり資本主義以前の諸条件のなかから原始的に形成されるばあいには、右の二つの基礎的条件が、なんらか産業資本の営みそのものの以外の方法で、あらかじめ

め与えられ、それが産業資本として結びあわせられるのでなければならない」(第四巻, p. 244)と書いておられる。マルクスは明白に「前史」といい、大塚氏もはっきりと「あらかじめ」と書いておられるわけだから、原始的蓄積を資本主義的生産様式の成立に時間的に先立つものとして理解するのが、一般的な考え方であろう。じじつ、M・ドップの『資本主義発展の研究』は、そうした理解ののうえに、「資本の蓄積がおこなわれていたという特別の一つの段階——資本主義的産業の成長そのものとは別な、そしてそれに時間的にさきだつ段階」(邦訳書, 上巻, p. 256)と理解している。

けれども、「前史」といい、「あらかじめ」という場合、ただ単に時間的な前後関係の意味にだけでなく、論理的な前後関係の意味にも解釈できるわけだから、その意味では、中産の生産者層の両極分解＝原始的蓄積＝産業資本の原始的形成という大塚氏の理論も、あなたがち非難しえないかも知れない。しかし、時間的にではなく論理的にであるにしても、「前史」ないし「あらかじめ」という以上、前と後とは明らかに別個のものである筈であり、大塚氏のように両者を殆んど一体視することは、やはり間違っているのではないだろうか。コスミンスキー監修の『世界中世史研究』(阿部玄治訳, 第二巻, 第一分冊)も、「原始的蓄積の過程と封建的生産様式内部における資本主義的ウクラートの形成は、……並行して行われ、互いに相互作用をした」(p. 27)と、両者の時間的な同時性は認めながらも、あくまでも別個の事柄であることを明らかにしている。いや、大塚氏自身、さきにみた文章のなかで、原始蓄積は「なんらか産業資本の営みそのものの以外の方法で」行なわれると述べられていたはずである。

(5)

大塚氏の原始的蓄積論についての、第二の、
 ヨリ重大な疑問は、前にも指摘しておいたように、「貧民」という表現にもうかがえる、「自由な」という規定の軽視である。つまり、原始的蓄積の要件としての農奴的隷属やツンフト強制の打破という問題が、軽視されている点について生じる。このことは、「封建制（＝封建的生産様式）の崩壊過程のなかから生じてくる広範な中産的生産者層」という表現にもみられるように、氏の場合は、同時に原始蓄積でもある中産的生産者層の両極分解、その出発点に立つ中産的生産者層は、「封建制の崩壊過程のなかから生じてくる」のであって、自らが封建制と対決するという姿勢をとっていない。むしろ、彼らの両極分解、すなわち資本主義的生産様式の成立と発展が、彼らの周辺の非自由な世界を掘り崩す役割を、ある程度は果す。けれども、その限度がきわめて小さなものでしかないことは、あとで第三の疑問を取上げる際にも指摘する通りである。

そしてわれわれは、中産者生産者層や「民富」の形成を説くに際して、大塚氏が、とりわけフランクソンの叙述によって、建国当時のアメリカの事情をあげられることに注目すべきである。しかし、われわれは忘れてはならない。アメリカはもともと封建社会をもたない国であり、そうしたアメリカの事情は、封建制との闘いのなかから近代資本主義をうみださねばならなかったヨーロッパや日本の場合とは、基本的に異なるということを。封建制との闘いを抜きにしては、ヨーロッパや日本の資本主義発達史は論じられないのである。

例えば、論文「オランダ型貿易国家の生成」

（『著作集』、第六巻所収）によって、オランダの場合をみよう。

「フランドルンの都市、なかんずくガンやイーブルの町々では、すでに中世のうちから、イギリス産の羊毛を用いて毛織物工業が栄え、十三世紀にはほぼその頂点に達し、広汎な問屋制度の展開を見たことは周知のことといつてよい。ところで、十四世紀の中葉あたりから、あたかもイギリスと並行するように、フランドルン、ブラバントの農村諸地域にも毛織物工業が展開しはじめた。そして、イギリスのばあいとは比較にならぬほどの堅固な都市禁制領域（Bannmeile）による農村工業の禁圧に対して激しい斗争を繰返し、しだいに、それをはねのけつつ、十五世紀末葉から十六世紀中葉には、そうした農村毛織物工場は、旧来の都市工業の衰退をよそに、ほぼ同じころのイギリスに優るとも劣らないほどの繁栄に到達していたのである。」（p. 216-7）

しかし、このオランダは、イギリスとはちがって、近代資本主義をずっと後世になってからしか樹立しえなかった。その理由は何か。その故をオランダ商業の仲継性に帰する人もあるであろうが、大塚氏自身は、そうした説明を否定される。すなわち、「イギリスのばあいに十七世紀前半の混合型からブルジョア革命を経て十八世紀前半の内部成長型に徹底していったように、オランダのばあいにも建国期ないし十七世紀前半の混合型から数次の政治的騒乱を経て、イギリスとは対蹠的に、十八世紀前半の中継貿易型に徹底していった」（p. 201）のであって、イギリスとオランダとの間に、この点についての違いは認められないと。

それではなぜ、イギリスは資本主義の母国たりえたのに、オランダは没落していくのか。大

塚氏は、南ネーデルラントでは「イギリスのばあいと同様、封建的な土地所有関係がすでにいちじるしく解体し、そのなかから、独立自由な自営農民層がぐんぐん分出しつつあった」が、北ネーデルラントでは、「旧来の封建的土地所有制、とくに経済外強制の体系としての裁判権の封建的システムが、南ネーデルラントに比べて、多かれ少なかれいっそう強固に残っていた」（p. 221）ことに、その説明を求められる。「オランダ共和国においては、こうした繁栄の真の基盤を形づくる中産的生産者層とその内部から成長する群小の産業資本は、結局封建的束縛から解放されることなく、逆に北ネーデルラントにおける旧来からの半封建的な経済構造の中に徐々にはめこまれていった。そして、このことが、二世紀にわたるオランダ共和国の社会構成の基本を決定したのである。」（p. 223-4）

つまり、オランダでは、イギリスに「勝るとも劣らないほどの」中産的生産者層の力をもつてしても、封建制の壁をつき崩すことは全く出来なかったわけであり、イギリスとオランダの運命を決したのは、中産的生産者層の優劣ではなくて、封建制の堅固さ如何、それがどの程度に解体されているかの違いであった、と大塚氏も認められるわけである。

要するに、近代資本主義が出現するためには、大塚氏のばあい、封建制は、中産的生産者層によって打破されるのではなく、最初から「すでにいちじるしく解体」されているものとして与えられていなければならないのであって、事情は、われわれ当面の問題である局地的市場圏のばあいも、全く同じである。このことは、後章で改めて検討する予定であるので、差し当りここでは、『西洋経済史』自身に問題の所在だけを指摘させておこう。

「こうした「中産的生産者層の両極分解」説は他面、とくに経済史家にとって、一つの難問をふくんでいる。それは、こういうことである。そうした、産業資本家を産みだしてくる「中産的生産者層」は、すでに多かれ少なかれ商品生産者化しているといっても、もともと封建制の支配下にあった農民ないし手工業者であり、したがってまた封建領主たちと根本において利益の一致する古いタイプの商人や金融業者、つまり「前期の資本」の支配をはねのけて、富裕となるばかりか、封建制とは歴史的にまったく異質な資本主義的産業経営の萌芽（いわゆるマニュファクチャー）をさえ形成しはじめるといったことがいったい、どのようにして可能であったのか。封建制の体制内の、いったい、どこに、そうした社会的間隙が存在していたのか。こういう難問に、どうしても答えねばならぬことになる。」（p. 14）

われわれは、大塚氏がここでいみじくも用いられているこの「社会的間隙」という言葉に注目すべきである。封建制から資本主義への移行をこうした「社会的間隙」によって説こうとするのが氏の理論の基本的性格であって、このことは、階級社会であるはずの封建社会を共同体として捉える共同体論とともに、方法的に根本的に誤っている、とわたしは考える。

なお、念のため、前にみたマルクスの文章、すなわち、商業がどの程度まで「古い生産様式の分解を惹起するかは、まず第一に、その生産様式の堅固さと内部構成との如何に懸る」という規定と、大塚氏のこの「社会的間隙」論とのちがいについてみておくと、「近代的生産様式は、その第一期なる工場手工業時代において、そのための諸条件がすでに中世の内部で産み出されていたところにおいてのみ発展した」とい

う表現からも明らかのように、マルクスの場合には、そのための諸条件が「すでに中世の内部で」どの程度に「産み出されて」いるかを問題にしている。大塚氏の場合は、「封建制の体制内の、いったい、どこに、そうした社会的間隙が存在していたのか」という態度であるが、マルクスは、「生産者を賃金労働者に転化する歴史的運動は、一面では農奴の隷属及び同職組合強制からの彼らの解放として現われる」、という。微妙な相違でしかないように理解する人もあるであろうが、この相違はじつに重大である。以下の諸章において、順次にその理由を明らかにしていくつもりであるが、あらかじめ問題の所在だけを指摘しておく。

(6)

大塚氏の原始的蓄積論に対する第三の疑問は、原始的蓄積という問題が、氏の場合にはじつは、産業資本家の原始的形成という問題に転化されてしまっているのではないか、という点である。原始的蓄積というものは、もともとは、産業資本の出現を可能にする二つの条件がいかにして実現されるかという客観的な条件の問題であるが、大塚氏のばあい、誰がその二つの条件を結びつけるかという主体の問題に転化されている。むろん、中産的生産者層の両極分解は、中産的生産者という主体の側面のほかに、その両極分解によって一方に資金が他方に自由な労働者が造出されるという、客観的条件の形成の側面をも、確かにかねそなえてはいえる。しかし、中産的生産者層がその両極分解によって作りだす資金と労働者とは、あとでも詳細にみるように、きわめて限られた程度のものでしかない。その舞台が局地的市場圏内に限られる場合、とりわけそうである。それは到底、

資本主義的生産様式の成立を可能にするほどのものではありえない。このことは、さしあたり、氏自身が『西洋経済史講座』の総説で次のように述べられていることによっても明白であろう。

「原始的蓄積の核心をなす経済的過程は、歴史具体的にはその周辺に、さまざまな形の経済外的な、しばしば暴力的な過程を伴ってあらわれた。これは、前述したように、両極分解の波頭にたつ産業資本の初期的形態（とくにマニュファクチャー）の生産力的基礎、したがってその競争力が、旧生産様式に対しても、また分解過程そのものの内部においても、なお幼弱であったため、おのずから必要とされるに至ったといつてよいものであるが、ともかく、産業資本の原始的形成は現実にはこうした経済外過程によって特徴的に伴われ、とくに、土地その他の生産手段から遊離された貧民の創出がそれによって著しく促進された。そのために、こうした直接生産者を生産手段から分離する経済外的局面のみが、しばしば原始的蓄積として物語られることにもなるのである。」（『著作集』、第四巻、p. 46）

大塚氏はここで、「直接生産者を生産手段から分離する経済外的局面のみが」と論難されているが、原始的蓄積とは元来がそうした性質の問題であり、氏のように誰が資金と労働者を結びつけるかということは、もともとがその中心的な課題ではないであろう。

そもそも、歴史において主体を問題とすることは、そのこと自体が常に誤りであるというわけでは決していないが、あくまでも慎重であらねばならない。たとえば、前にみた文章でも明らかにされていたように、原始的蓄積の遂行者としてマルクスのあげていた者たち、すなわち、

封建家臣団の解体や修道院の解放をおこなった王権にしても、その王権や議会に最も頑張りに抵抗しつつエンクロジューを行った大封建領主にしても、なにも産業資本を育成することを目的にそうした政策を強行したわけではない。彼らは彼らなりに、そのおかれた必要に迫られて、その客観的な結果が封建制度を倒すことになるなどとは夢にも思わずに、行動したのである。また、産業の騎士が剣の騎士を駆逐できたのも、彼らの全く与り知らぬ諸事件を利用することによってであった。歴史を動かすものはあくまでも人間であり、その意味では主体の問題に関心を払うことが大切だが、同時に人間は、彼自身の主観としては主体として行動している場合にも、そのじつは客観的な条件や法則に規制される客体でもある。産業資本の担い手にしても、大塚氏は強くその『系譜』に執着されるが、マルクスはおそらく、資本の人格化されたものとして以上には関心を払わなかったであろう。『資本論』第二十四章が「資本家的借地農業者の生成」や「産業資本家の生成」を取扱いつながりながら、資本家そのものではなくて資本蓄積の契機を重視しているのは、おそらくそのことる物語っていると考えられる。

エンゲルスも、『資本論』第三巻への補遺のなかで、事柄は商人についてであるが、同じような態度を示している。すなわち彼は、商人こそは封建社会における革命的要素であり、彼からこそこの世界の変革は発出すべきであったと述べたあと、次のように書き添えている。「だが、決して意識的な革命家としてではなく、正反対に、旧世界の肉を肉とし骨を骨として。」（第八分冊，p. 60）

(7)

最後に、原始的蓄積の本質が暴力であるかど

うかという点について検討しておけば、マルクスは、「強力は新しい社会を孕むすべての古い社会の助産婦である」(p. 330)と述べており、「一聯の暴力的方法を包括する」(p. 347)と書いているところからみても、すべてを暴力によって説明するものではないことが明白である。また、第二節「農村住民からの土地収奪」では、「ここでは農業革命の純経済的原動力は問題外とする。ここではその暴力的植杆を問題としよう」(p. 282)と述べている個所もみられる。ほかに、たとえば『資本論』断片（岩波文庫版『資本論要綱』所収）は、「かの収奪過程は部分的には強力的行為として資本主義的生産様式の序曲をなす」(p. 304)と述べ、強力に「部分的」な役割をしか認めていない個所さえもある。このことは、『ドイツ語・イデオロギー』において、封建制度の成立を征服によって説明しようとする見解を激しく攻撃しているマルクスとしては、いわば当然のことであろう。

それにも拘わらず、原始的蓄積を語る際のマルクスの、あの言葉の限りをつくしての非難の激しさを、われわれは忘れるべきではない。彼は、「直接生産者の収奪は、全く仮借するところのない野蛮をもって、最も陋劣、醜悪、卑怯な憎むべき激情の衝動の下に遂行される」といい、「資本は頭から爪先まで、毛穴という毛穴から、血と脂とを滴らしつつ生まれる」といい、「収奪の歴史は、血と火の文字をもって人類の記録に書きこまれている」と書いている。このような激しさは、もともとが「社会的間隙」を求めて、つまり封建的土地所有が「すでにいちじるしく解体」しているばかりにのみ原始的蓄積の進行を認められる大塚氏にとっては、無縁であるのが当然である。

われわれはとりわけ、『資本論』第二十四章、

「いわゆる本源的蓄積」の冒頭が次のような文章に始まることを忘れるべきではない。果してわれわれは、大塚氏のように、経済外的過程は基本的過程、すなわち中産の生産者層の両極分解をただ単に「媒介」するにすぎないとか、核心ではなくて「周辺」にすぎないとかいう風に、暴力の問題を簡単に処理しうるであろうか。わたしは、『資本論』のこの個所を読むとき、いつも、あたかもマルクスが大塚氏の理論を予想して書いているかのような感じをさえ抱かせられる。

「この本源的蓄積が経済学において演ずる役割は、原罪が神学において演ずる役割とほぼ同じである。その起源は、それが過去の小話として語られ説明される。久しい以前のある時に、一方には勤勉で伶俐で、とりわけ儉節な選り抜きの人があり、他方には怠け者で、自分のすべてのものを、またそれ以上を浪費するやくざ者があった。神学上の原罪の伝説は、とにかく我々に、いかにして人間が額に汗して食うべく定められたかを物語るのであるが、経済学上の原罪の物語は、そんなことをする必要のない人々があるのはどうしてかを我々に示すものである。それはとにかくとして、前者は富を蓄積し、後者は結局自分の皮以外には売るべきものを何ももたないということになった。そしてこの原罪以来、あらゆる労働にもかかわらず今なお自分自身以外に売るべきものをもたない大衆の貧窮と、久しい以前から労働することをやめたのになお引きつづき増大する少数者の富とが生じたのである。……現実の歴史においては周知のように征服、圧制、強盗殺人、要するに暴力が、大きな役割を演ずる。ものやましい経済学では初めから牧歌が支配していた。正義と『労働』とは初めから唯一の致富手段だ

った。もちろんそのつど『今年』だけは例外だったが。実際には本源的蓄積の方法は、他のありとあらゆるものであっても、ただ牧歌的でだけはなかった。」(p. 266-7)

第二章 レーニンの場合

(1)

先に進もう。『西洋経済史』は、「中世末ないしそれ以後の時期に、封建制の体制の内部から資本主義の自生的な発展がまさに始まろうとするさいには、必ずといってよいほどその波頭にたつ地域の農村地帯に、ある共通の独自な特徴をもつような局地的な経済圏があまた、数珠つなぎになって姿を現わしてくる、という現象がみられた」(p. 14)とし、その特徴を次のように規定している。

「第1に、この経済圏の内部においては、生産、流通、分配、消費のいずれをとってみても、旧来の封建制のばあいのように土地の所有（および保有）関係を介しておこなわれる必要はいちじるしく小さくなっている。したがってまた、土地所有（および領有）関係を通じておこなわれてきた封建領主たちの支配も、そこでは、もはやその機能を十分にはたしえなくなったことになる。そして第2に、この経済圏の内部にも小商人たちがいないではないが、小商品生産者どうしの直接の売買（ないし商品交換）が可能であり、かつ優越しているであろうことがさまざまな史実から容易に推測されうる。ということを裏からいえば、従来からの遠隔地間商業にたずさわってきたような商人たちが村民たちの生活に外部から介入し、そこから商業利潤をひきだして、彼らを貧窮化させるような余地がここではいちじるしく小さくなっているこ

とを意味する。そればかりではなく、第3に、小商品生産者どうしの間の直接の売買関係が優越していることは、他面からいえば、そうした経済圏の内部では、外部との物資の交流にあまり依存することなく日常の経済生活がつづけられていることを意味している。言うならば、経済圏としての自給自足の傾向を示しているのであり、経済的に外部からの支配を脱して自立的な発展へと向かうような可能性が既にはらまれているともいえるであろう。」(p. 15)

同じ内容は、別の個所でも繰り返して示して補足されている。

「さきに「局地的市場圏」の内部では小商品生産者どうしの商品交換が優越し、かつ経済圏全体として自給自足の傾向を示している、といった。が、このことが可能であるためには、(1)その経済圏内部で人々の生活に必要なものがほぼすべて生産され（貨幣素材や塩等々といった例外はもちろんつねにありうる）、(2)さらにそれらの物資を生産する諸生産部門がまた、相互に過不足がないように、ほぼ一定の割合を保っていなければならない。つまり、「局地的市場圏」内部における社会的な分業の関係はいわば自立的な構造をなしており、そうした社会的分業の構造が土台としてその独自の市場構造をつくりだしていたのである。」(p. 17)

(2)

『西洋経済史』はさらに、こうした局地的市場圏の「みごとな理論的先蹤」はレーニンの論文「いわゆる市場問題について」であると述べている。(p. 18) だが、レーニンのこの論文は果して大塚氏のいわれるような内容のものであるか。氏自身も、「この読み方には強い反対のあることを附記しておく」、とことわってお

られるが、以下わたしの見解を述べることにする。

レーンがこの論文を執筆したのは、ロシアでは人民大衆の貧困化が資本主義の発達を許さないと主張するナロードニキの理論を打破するためにであった。そこで彼は、6人の生産者からなる共同体を例とし、その経済制度の逐次的変化を表式化して社会的総生産物の実現の問題、すなわち「いわゆる市場問題」の経済学的分析を展開してみせている。大塚氏は、レーンがこの表式の出発点に6人の「生産者」をおいていること、資本家も労働者もその6人の「生産者」の中から出現させていること、つまり「生産者」の両極分解によって資本主義の発達を説明していることに、自らの局地的市場圏論との符合を見出されているように思われる。しかし、レーンが目指しているのは、繰り返していうが、「市場問題」についての経済学的分析であって、資本主義の発達を歴史的に説明することではない。

そのちがいはどこにあるか。具体的に示さう。

まずレーンの表式自体について簡単に説明しておく、その第1期においては6人の生産者がいるが、このすべては自分の労働を三つの産業部門（a 農業、b 採取工業、c 加工工業）に支出し、えられる生産物を同じ自分の経済の中で自分のために消費している。「だから、ここには現物経済の純粹の姿があるのであって、生産物は全然市場にはいらぬ。」

第2期。第1の生産者がその労働の生産性を変える。彼はb産業を放棄し、従来この産業部門にもちいていた時間をc産業に支出する。一人の生産者のこのような専門化のために、他の生産者たちはC産業を縮少し、bの生産を強化

する。「ここにあらわれた分業は、不可避免的に商品生産にみちびく。」

第3期。分業はさらにすすんで、bとcの産業部門を完全につかむ。

第4期。すでに資本主義的生産がえがかれており、賃金労働者が登場している。その過程を見ると、前段階までにすでに、各生産者はbとcの部門で商品生産者であった。「各生産者は、個々に単独で、他の生産者とは係わりなく、市場のために生産した。市場の大きさはもちろん、彼らのうちのただ一人にもわかっていなかった。共通の市場のために働いている孤立した生産者たちのこの関係は、競争と呼ばれる。自明のことながら、生産と消費（供給と需要）とのあいだの均衡は、この条件のもとでは、あいつく動揺によってのみ達成される。よりじょうずな、企業心に富む強力な生産者は、これらの動揺の結果、さらにいっそう強力になる。そして、力の弱いへたな生産者は、その動揺によっておしつぶされるであろう。少数の人の富裕化と大衆の貧窮化——これが、競争の法則の不可避的な結果である。」

以上が表式についてのレーニン自身の説明である。

ところで、問題は第1期の「現物経済の純粹な姿」から第2期以降の「商品生産」への、さらには「競争の法則」の登場への事態の進展である。この進展をひきおこす原因が、果してこの表式自体の中から出てくるであろうか。マルクスは、『資本論』の中で、「ある経済的社会形式において、生産物の交換価値ではなく使用価値が主たる地位にある場合には、剰余労働は広狭の欲望範囲によって制限されていて、剰余労働に対する無制限の欲望は生産そのものの性格からは生じない」（第二分冊，p. 164）と述べて

いる。むろん、事態のこうした進展をひきおこすものが何であるかは、市場問題の分析だけを課題とするレーニンの場合には、さしあたり明らかにされる必要はない。しかし、歴史論として資本主義の成立を論じようとされる大塚氏の場合には、絶対に回避することが許されない問題である。そしてこの課題は、商業の役割を無視しては全く解決できないであろう。再びマルクスについてみれば、彼は、いかなる生産様式の基礎の上にも、商業は、生産者（ここでは生産物の所有者と解せられるべきもの）の享樂または退蔵貨幣を増加させるために交換に入るように定められた剰余の生産物の生産を促進する。したがって、ますます交換価値に向けられた性格を、生産に与える。」（第九分冊，p. 191-2），と述べている。

さらにもう一つ。大塚氏の局地的市場圏論は、この経済圏のもつ三つの特徴の一つとして、さきにみたように、「経済圏としての自給自足の傾向」をあげている。ところがレーニンは、上記の表式を説明したあとで、わざわざ次のようにことわっている。

「ここで、ひとことことわっておかなければならない。前述したすべてのことは、資本主義的国民は外国の市場なしには存在しえないという命題を、すこしも否定するものではない」と。

もっとも、ここでのレーニンの説明はきわめて簡単であり、その意味がわかりにくい。そこで、彼のいま一つの著作、『ロシアにおける資本主義の発達』の中で述べている同じ内容の指摘、すなわち、同書、第一章、第八節、「なぜ資本主義的国民にとって外国市場は必要か」から、関連の箇所を引用することにする。

「資本主義国にとっての外国市場の必要性

は、けっして社会的生産物（および特珠的には剰余価値）の実現の法則によって規定されるのではなくて、第一に、資本主義は商品流通が広範に発展して国家の境界外に出ていく結果はじめて現わる、ということによって規定される。だから、外国貿易のない資本主義的国民を考えることはできないし、またそのような国民は存在しない。

読者はおわかりのように、この原因は歴史的性質のものである。……

第二に、社会的生産の個々の部分間の照応（価値の点での、また現物形態の点での）は、社会的資本の再生産の理論によって必然的に仮定されたものであり、そして実際には一連のたえまない動揺のうちにつくられる平均的な大いさとしてのみなだめられるのであるが、——この照応は、資本主義社会では、未知の市場のために働いている個々の生産者たちの孤立性によって、たえずやぶられている。相互に「市場」として役立たず種々の産業部門は、均等に発展するものではなく、相互においこしあっている。そして、より発展した産業は外国市場をもとめるのである。…

第三に、前資本主義的生産様式の法則は、従来の規模での、従来の土台のうえでの生産過程の反復である。地主の賦役経済、農民の現物経済、工業者の手工業生産は、そういうものであった。それとは逆に、資本主義的生産の法則は、生産方法の不断の改変と、生産規模の無限の拡大である。古い生産様式のもとでは、経済単位は、その性格の点でも規模の点でも変化することなく、地主の世襲領地、農民の村落、あるいは農村の手工業者や手工業者（いわゆるクスターリ）のための附近の小さな市場という限界からはみでることなしに、幾世紀も存続する

ことができた。それとは逆に、資本主義的企業は、不可避的に、共同体や地方市場や州の境界をこえ、さらにまた国家の境界をもこえて成長していく。……

以上のことから、われわれは外国市場の必要性の最後の二つの原因もまた、歴史的性質の原因であることを知る。それらの原因を究明するためには、個々の産業部門、国内におけるその発展、資本主義的産業部門へのその転化を、考察しなければならない。」（大月書店版、『レーニン全集』、第三巻、p. 43-5）

思うに、大塚氏のあやまりは、生産者は自主独立、商人は隷属をもたらしという、『近代資本主義の系譜』以来氏が強く主張されつづけてこられた独自の考え方にわざわざされて、商品生産の商人なしの発達という無理な構想を強弁されようとするところに根差している。局地的市場圏は「小商品生産者どうしの直接の売買」を特徴とし、経済圏としての自給自足の傾向をもつと氏はいわれるが、このように規定された経済活動のあり方から、ひとびとはどうして資本主義的な発展を展望しえよう。それはむしろ、上に引用した文章のなかでレーニンのいう、「従前の規模における、従前の基礎における生産過程の反復」、すなわち前資本家的生産方法の法則の支配を想起させこそすれ、「生産方法の不断の革新と生産規模の無制限的な拡大」の世界を思い描くことはできない。

M・ドップは、「資本主義の成長そのものが資本主義そのものの市場の発展に役立ったことは事実である」とし、十六世紀のイングランドで羊の飼育の盛んな地方は、農家の生活の裕福さ加減を代表する家具類の消費の高い地方でもあったと指摘しながらも、イギリス資本主義の発達上、輸出市場の拡大がいかに重要であった

かを、次のように説明している。

「製造品のための国内市場が、この時代以前には、いかにせまいものであったかを考えると、その重要性が少しは判断できる。なるほど、都市の順風に乘った中産階級の発達それ自体が、手工業製品に対する相当な市場をもたらした。そして、このかぎりにおいて、ブルジョワジーの数が殖え富が増すことは、産業を促進するための一つの大切な条件であり、順風に乘った中産階級は、数すくない商人貴族の豪勢な暮らしよりも重要であったにちがいない。しかしながら、この上昇しつつあるブルジョワジーは、つつましい階級であって、かれらが手工業で得た所得があらわす実質価値にくらべると、かれらが手工業製品の消費に当てた金額ははるかに少なかった。その支出がふえるとしても、それは製造業の成長にさきがけてそれを導いたのではなくて、むしろ一般に製造業の成長にともなっていたのである。それと同時に、大衆の生活水準を制限することが資本蓄積を増大するための一つの条件であったのであるが、まさにその制限そのものが、奢侈品以外のすべてのものに対する市場をずいぶんと狭めていた。

羊毛工業がギルドと都市経済の境界を越えて拡大した最初の時代から、イングランドの主要な産業は輸出市場に高度に依存していた。そして、十五、六世紀のイングランドの毛織物生産地帯の境界は、ネザーランドとドイツにおけるイングランド産毛織物の販路の拡大と、密接に歩調をあわせてひろがっていった。」(上巻, p. 281)

いや、『西洋経済史』自身が次のように述べている。

「局地的市場圏の内部においては、さまざまな生産諸部門がほぼ均衡のとれた割合をたもっ

ており、全体としていちじるしく自給自足の傾向をしめしているのがその特徴であったことは、さきに指摘しておいたが、もし、その生産諸部門のいずれか一つないし二つ(たとえば、毛織物工業とか金属工業というような)に対して、その外部に有力な販路がいらかれるとなると、その生産部門はしだいに均衡を失って肥大化し、その自給自足性を破壊しはじめる。そうした傾向は、さきに摘記した十四世紀後半のイングランドの農村工業にあっても、すでに看取されたといつてよい。」(p. 40)

イギリス資本主義にとってその成長の基盤となった商品が毛織物であることは衆知のことであるが、大塚氏はここで、この毛織物こそはそうした肥大化の「とくに代表的な商品」であったと認められているわけである。したがってそれは、「どうしても局地的市場圏の外部で販売されねばならない」(p. 41)とも書いておられる。

もっとも大塚氏は、『著作集』第七巻所収の論文、「共同体をどう問題とするか」で、毛織物工業が輸出を基礎にしていたことを認めながらも、なお次のようにそれを捨象することの正当性を主張されている。

「複雑をきわめた歴史過程にずばりとメスを加え、その一部分を遠慮容赦なしに捨象し、その基本線だけを残して、それを明確な形で押し出していく努力がいるわけです。これは、およそ歴史のうちに一般的な法則を追究しようとするばあい、どうしても避けがたいことであり、必要かつ正当なことであると思うので、ここでも私はその方法をとることにします。」(p. 216)

わたしもまた、歴史の法則を明確に押し出すためには複雑な歴史過程にメスを加えることが必要であると思う。しかし、問題は何をどのように捨象するかであって、本来捨象すべきで

はないことを捨象すべきではない。外国貿易が資本主義の成立期においては不可欠の前提であったことは、すでにマルクスの明言しているところである。岩波文庫版『資本論』、第九分冊、P. 48 参照。

木下悦二編『貿易論入門』もいう。

「商品流通は、地方的流通→国民的流通→国際的流通→世界的流通というように継起的に発展してきたものでは決してない。共同体と共同体との交換をもし外国貿易と呼ぶなら、外国貿易から商品流通の歴史がはじまっていて、それがやがて共同体内部に商品生産の発展を促し、やがて資本主義生産様式の確立に導いたのである。日本のように、世界市場から孤立していたにもかかわらず、商品生産の一定水準の発展がみられた国においてさえ、資本主義生産様式の確立は世界市場の影響の下にはじめて可能であった。」(p. 90)

(3)

局地圏外との商業の捨象がどんな間違いをうむか、少し立ちいって検討しよう。次に掲げるのは、『西洋経済史講座』第二巻（『著作集』、第四巻所収）の「総説」にみえる、局地的市場圏が産業資本の培養基であると述べた個所である。

「何故に、またどのようにして、局地的市場圏はそうした産業資本の培養基となりえたであろうか。それにはさしあたって次の点が指摘されうる。すなわち、前述したように、局地的市場圏の内部では封建制支配による封建地代の收取や前期的商業資本による譲渡利潤の抽出の可能性が低下する結果、そこでは民富の形で「萌芽的利潤」がひろく形成されはじめるということである。これは資本主義の生誕にとって、もとより、不可欠な事柄である。しかし、さら

に、局地的市場圏の基盤のなかから産業資本家と賃金労働者、この両者を生みだす、つまり産業資本の歴史的な形成を必然化するような、さらに積極的な事情がそこになければならない。それは何か。端的にいうならば、歴史上局地的市場圏の基盤のうで始めて、土地所有にもとづく共同体や封建制の規制を排除し、また前期的資本の買い叩きにも余地をあたえずに、「生産物のほぼ価値どおりの販売」による自由な等価交換の関係が、例外的ないし偶然的でなく、一般化しうる——これが価値法則の貫徹である——ということである。では、何故に、価値法則の貫徹が中産的生産者層のなかから産業資本家と賃金労働者とは押しだしてくることになるのか。生産物がほぼ〔市場〕価値どおりに、つまり《labour and expense》に密着した平均価格によって一般に販売されるばあい、より良い生産条件の所有者——技術的諸条件のほかに家族数や技能をも含めて——のもとにはたえず余剰が生ずるのに対して、より悪い生産条件の所有者のもとにはたえず損失が生ずるのである。こうして、局地的市場圏の内部では、一面における一般的富裕化の傾向とともに、他面においてはたえず貧富両層への分化が進行しはじめることになる。」(p. 218)

× × × ×

このような大塚氏の原始蓄積論については、第一章ですでに一応は述べておいたように、わたしは数々の疑問をもつ。けれども、ここでは、歴史上局地的市場圏においてはじめて等価交換が一般化し、その結果として生れる余剰の差が産業資本の形成を可能にする、という点に限らう。

前にみたように、大塚氏の局地的市場圏は、「小商品生産者どうしの直接の売買」を特徴と

する。したがって、そこにおける交換が等価であるということには、わたしにも異論はない。この意味では、大谷瑞郎氏の『大塚理論批判』、『経済史学批判』(p. 47-8)には賛同できない。けれども、わたしの納得のいかないのは、この種の交換からはせいぜい民富の形成はありうるとしても、氏のように、その民富から直接に、つまり商業その他の要素を考えに入れずに、産業資本の形成と成長とを説くことにある。

わたしは、大塚氏とちがって、局地的市場圏内では、等価交換であればこそ、ある程度の貧富の分化は免れ角として、産業資本の誕生を展望しようような階級分化は生じない、と考える。なぜなら、等価交換とはいっても、資本主義の成立した段階におけるものとは異って、それはまだ殆んど単純再生産に近い世界であり、大塚氏の見解にしたがって成立当初の局地的市場圏を想定すれば、そこにはまだ労働力の商品化があまり行われていないと考えねばならぬからである。なるほど、それでもなお、生産者ごとの得失のちがいはある程度あるであろう。したがって、ある程度の民富の成立は可能であろう。けれども、それはあくまで民富であって、資本にはまだ直接には結びつかない。マルクスが、さきにみた第二十四章で、14世紀の後期、ことに15世紀のイギリスでは人口の大部分が自由な自営農民からなりたっていたこと、そうした事情は、「大法官フォテスキューがその『イギリス法の讃美』において雄弁に描いているような人民の富を許したのであるが、しかしそれは資本の富を容れなかった」と述べていたことを想起すべきであろう。

また、『資本制生産に先行する諸形態』(河出書房版、『マルクス』所収)は、もっと積極的に次のように述べている。

「純粋な等価交換の方法で、ある程度貨幣が蓄積されうるということは、われわれのみたところでありである。それにも拘わらず、これはごくいうに足りない源泉をなすものにすぎないから、——貨幣が自己の労働の交換によって獲得されると前提した場合でも——歴史的には言及するに及ばない程度である。本来の意味での資本に、すなわち産業資本に転化されるのは、むしろ高利貸——特に土地所有に敵対してさえ営まれた——と商人利得によって蓄積された動産——貨幣財産である。」(p. 292-3)

「貨幣財産の資本への転化以前の貨幣財産自体に関しては、それはブルジョア経済の前史に属する。その際は、高利貸、商業、都市制度およびそれらとともに国庫が、主役を演ずる。借地農、農民等々の蓄蔵(Hoarden)もまた、より少ない程度においてであるが、同様の役割を演ずる。」(p. 297)

しかも、同じ論文のもう少し先の部分では、当の大塚氏自身が、局地的市場圏内の貧富の分化について次のように認めておられる。

「中産的生産者層の成立期には《mediocrity of fortune》(フランクリン)ともよぶべき富の分配の或る平等性が、たしかに、比較的目立っているが、しかし旧い時代からもちこされた貧富の不平等の残滓に加えて、新しい両極分解による貧富の不平等が踵を接して始まる。」(p. 220)

とうとう「旧い時代からもちこされた」不平等の残滓まで持ち出されてきたのには驚いた。たしかにそうした不平等は事実上は存在したはずであるが、「残滓」という言葉からもうかがえるように、じつはそうしたものの存在を否定するのが局地的市場圏論であるとわたしは考えていたのだが。なぜなら、封建社会における富

の不平等は主として土地所有の不平等という形をとるが、この土地所有の不平等はまた常に封建的關係を作りだす、というのがいわゆる大塚史学に属する人々の共通の考えであると理解するからである。たとえば、吉岡昭彦氏の寄生地主制論や封建の分解論。

いや、大塚氏自身が、1954年の土地制度史学会における「綜括報告要旨」において次のように述べられている。

「小ブルジョア経済は、何ほどかでも成立しはじめるや否や、そこに資本主義的な階級分化をよびおこすようになる。ところが、こうした資本主義的な両極分解は、初期には、多かれ少なかれ直ちに一定の限界で阻止される。いうまでもなく、「局地的市場圏」の狭隘さが客観的にその限界を画する。もし小産資本家（およびそれに従属する小商人）がこの限界をこえて、さらに大規模に利潤の追求をつづけようとするならば、その瞬間から彼らの蓄積基盤は、「局地的市場圏」からはみでて、性質のまったく異なった「局地間商業」に移行するからである。すなわち、小ブルジョアの生産者（および小商人）は、その経営規模の拡大が一定の限度をこえるやいなや前期的資本家に転化し、その利害は、「局地間商業」を媒介として、逆に古い「共同体」関係（すでにある程度分解しはじめているが、なお根をしっかりと残しているところの「共同体」関係）の維持と再編制に結びつくようになる。こうして前期的商人は新しい形の封建的地主へと上昇転化していく。寄生地主制の展開と「共同体」の再編制、強化。「村の旦那」*Cog d'un village*。この過程における地主＝マニュファクチャーの形成、その共同地利用。」（『著作集』、第七巻、p. 266）

つまり大塚氏は、小産業資本家の段階におい

ても、局地的市場圏の限界をこえて利潤の追求をしようとする「蓄積基盤」が移行する、といわれるわけだが、わたしは、民富の段階においてすでに、すなわち大塚氏のいわゆる「局地的市場圏」においてすでに、彼らの蓄積基盤の主体はむしろ高利貸や商業にあったと考える。むしろ彼らは、同時に織元でもあるわけであり、その意味において、大塚氏の考えられような「前期的商人」ではないわけであるが、局地的市場圏という現実離れのした世界を設定しさえすれば、事態は一挙に「旧来の封建制とはおよそ異質の原理をもつ」ように変るものではあるまい。『西洋経済史』自身がいう。

「当時のイングランドでは、まだまだ「局地的市場圏」がすべてではなかった。それは、いわば封建制の大海のなかに濃淡さまざまに散らばった島々にすぎなかった。したがって、「局地的市場圏」の外に出れば、なおいたるところに、解体しはじめているとはいえ、封建的な農村共同体とそのうえに築かれたマナー制度があり、ギルド制特権都市とそれを拠点とする前期的商人層があり、さらに彼らの活動の足場をなす古い遠隔地商業とそれにむすびつく市場関係があった。そこで、肥大化した生産部門、たとえば毛織物の製造を営む「織元」(clothier)が、その製品をたずさえて商人として遠隔地との取引にたずさわろうとするためには、それを前提とし、そのうえに乗っていくよりほかはありえなかった。これが大切な点なのである。」

(p. 41)

だが、そうだとすれば、局地的市場圏論は破産してしまう。大塚氏はいったい、どのようにしてこの破産の危機を脱出されるのか。『西洋経済史』は、織元層のこうした前期的商人や寄生地主への上昇・転化は、「絶対王制」の成立期

にはいつそう強く、その後半期には、小ブルジョア的＝ブルジョア的发展（「局地的市場圏」の「地域的市場圏」への成長、拡大がそれに照応）によってしだいに阻止されるようになる。社会的勢力関係が漸次に変化する」と説明している。またさきにみた1954年の学会報告は、『農民層分解におけるこうした複雑さを資本主義的分解、すなわち、産業資本家と賃金労働者形成の方向へと集約かつ単純化し、それによって「共同体」（およびその上にたつ支配関係）を終局的に崩壊せしめる方向に働くところの経済的＝物質的条件は、「局地的市場圏」のいっそうの拡充と、その基盤の上で進行するブルジョア的发展に他ならぬ」（p. 298）、と述べている。

だが、「局地的市場圏のいっそうの拡充」や地域的市場圏への成長を誰がいったい押し進め、何がいったい可能にするのか。島々にすぎない「局地的市場圏」自体に「封建制の大海」を解消する力があるというのか。『西洋経済史』はその役割をエンクロジューに担わせる。

「トローニーによると、……エンクロジューへの動きはもともと14世紀後半あたりから、小商品生産者としての農民たちのあいだに芽生えたものであった。ところが、15世紀末葉から毛織物工業が急速な繁栄への途をたどり始めるとともに、こんどはこれがマナー領主と、小生産者たちのあいだから成長してきた大借地牧羊業者の協力によっていわば上から強力に行なわれはじめた。それはしばしば暴力的な土地収奪をとらない、その結果多数の流民をうみ、それがかえって資本主義の発展の前提条件とさえなったとされている。」（p. 39）

皮肉にもわれわれは、ここにいたって、さきに氏自身が「媒介」ないし「周辺」と貶され

た、マルクスのいわゆる「本源的蓄積」に依拠されているのを見る。

（4）

最後にもう一つ。大塚氏は、「歴史上局地的市場圏の基盤のうえで始めて」等価交換が行われると断定されているが、この断定は正しいであろうか。わたしは、『資本論』第三巻への補遺において、エンゲルスが、マルクスの価値法則は単純商品生産の全時代、つまり、「交換の当初から紀元十五世紀に至る期間に対して」妥当した、と述べていることを想いおこす。彼はそこで、まずはじめに中世の農民家族は大体において自給自足であったと述べたあと、次のようにつづけている。

「このような家族が、他のそれから交換して手に入れるかまたは買入れるかしなければならぬ僅少のものは、ドイツにおいて十九世紀の初頭に至るまでも、主に手工業的生産の対象物から成っていた。すなわち、その製作法は農民にとって決して未知ではないが、ただ原材料が得られないか、或は買入れた品物の方がずっと良質であるか、またずっと低廉であるという理由で農民が自ら生産しないものから成っていた。それ故に中世の農民にとっては、彼の交換して得た対象物の製作に要する労働時間は、かなり明確に知られていた。そればかりでなく村の鍛冶屋、車大工は彼の眼前で労働した。裁縫師、靴師もまた同様であった。彼らは、私の少年時代にもなお、わがライン地方の農家を順次に訪れては、自家製の材料を加工して衣服や靴をつくった。農民に売った人々も、共に自ら労働者〔直接生産者〕であった。交換された品物は、その各人自らの生産物であった。彼らはこれらの生産物の製作にあたって何を投じたか。労

働、ただ労働のみ。すなわち、道具の補充に、原材料の製造に、その加工に、彼らは彼ら自身の労働以外の何物も支出しなかった。従って、彼らは、彼らのこれらの生産物を他の自ら労働する生産者のそれと交換するのに、これに用いられた労働の比例による以外に如何にしていなす得ようか。……農民的自然経済の全時代にとって、交換された商品量が、次第にその中に体现されている労働量によって計られる傾向をもつような交換以外に、いかなる他の交換も不可能である。貨幣がこの経済様式に潜入した瞬間から、価値法則への適応の傾向は、一方においては一層際立つようになり、しかし他方ではまたすでに高利貸資本と国庫の絞り取りの介入によって破られるに至る。すなわち、価格が平均において無視し得べき大いさまで価値に近づく期間は、すでにヨリ長くなる。

同様のことが農民生産物と都市手工業者の生産物との間における交換に対しても妥当する。最初この交換は、商人の仲介なく、都市の市日に直接に行われる。そこで農民は売却と買入れをする。ここにおいても、手工業者の労働諸条件が農民に知られているのみならず、農民の労働条件もまた手工業者に知られている。というのは、彼自身がなおいくらか農民であるからである。彼は菜園や、果樹園をもっているのみならず、往々にしてそこばくの耕地をもち、一二の牝牛、豚、家畜等々をもっている。中世の人々は、こんなに各人が、相手の原材料、補助材料について、かなり正確に生産費用を、すなわち労働時間を算出することができた。——少くとも日常一般使用の品物に関する限り。……

一言でいえば、マルクスの価値法則は、いったい経済法則が行われる限り、一般に、単純商品生産の全時代に行われる。従って単純商品生

産が資本主義的生産形態の登場によって変形を受ける時まで行われる。その時まで、価格は、マルクスの法則によって規定される価値という重心に向って運動し、またこの価値を中心として振動する。したがって、単純商品生産が完全に展開すればするほど、外部からの強制的擾乱によって中断されない、比較的永い期間の平均価格は、無視し得べき限界内において、ますます価値と一致する。マルクスの価値法則は、こうして、生産物を商品に転化する交換の当初から紀元 15 世紀に至る期間に対して、経済的な一般的妥当性をもつ。」（『資本論』、第八分冊、p. 55-9）

いや、マルクス自身がすでに次のように述べている。

「その価値通りの、または近似的に価値通りの、諸商品の交換は、資本主義的發展の一定の高さを必要とする生産価格での交換よりも、遙かにヨリ低い一段階を必要とするのである。相異なる諸商品の価格が最初まずいかにして相互に確定または規制されるにせよ、価値法則は諸商品の価格の運動を支配する。他の事情が不変である限り、諸商品の生産に必要な労働時間が減少すれば価格は低下し、この労働時間が増加すれば価格は上昇する。したがって、価値法則による価格及び価格運動の支配は別としても、諸商品の諸価値を、単に理論的にのみでなく、歴史的にも、生産価格の先行者 (des prius) と見ることは、全く適切である。このことは、生産手段が労働者に属する諸状態に当てはまる。そしてこの状態は、古代世界においても近代世界においても近代世界においても、自ら労働し土地を所有する農民及び手工業者において見出される。これはまた、我々が前に述べた、諸生産物の商品への発展は、相異なる諸共同体のあ

いだの交換によって生ずるのであり、同一の共同体の諸成員のあいだの交換によって生ずるのではない、という見解とも一致する。……

諸商品が相互に交換される際の価格が、諸商品の価値と近似的に一致するためには、次のこと以外の何ものを必要としない。(1)種々の商品の交換が、純粹に偶然的なものや単に臨時的なものであることをやめること。(2)我々が直接的

商品交換を見る限り、これらの商品が近似的に相互欲望に対応する比例量で生産されること。これは相互の販売経験のもたらすことであり、したがって継続的交換そのものからの結果として生ずることである。」(『資本論』、第八分冊、p. 325-6)

——以下次号——